

《ポーランドだより》

我ら、ポーランド人

～ポーランド洗礼1050周年記念行事から～

津田 晃岐

1. 国家草創——グニェズノ

今年2016年はポーランドにとって特別な年だ。というのも、西暦966年にポーランドがキリスト教を受容してから1050年目、つまりポーランド洗礼1050周年なのだ。ポーランド国家の洗礼とは、直接にはピヤスト王朝の祖ミェシュコ1世(在位960頃-992)が洗礼を受けたことを指す。ポーランド公(「王」の称号を戴くことは生涯なかった)ミェシュコ1世は965年、ボヘミア公国(現在のチェコ)のボレスラフ1世残酷公の娘でキリスト教徒のドブラヴァと結婚し、翌966年、自らも洗礼を受けた。それに伴って、ミェシュコ1世の統治のもと初めて国家として形成されつつあったポーランドもキリスト教化されていった。

当時の国家は統治者の本拠地である都市国家とその版図から成っていたが、統治者たちは必要に応じて本拠地を変え、その都度、周囲に防壁を巡らした囲郭都市を築いていった。そうした本拠地の中で最も重要なのはグニェズノ(ヴィエルコポルスカ県)で、長くポーランド黎明期の首都であり続けたため「ポーランド国家草創期博物館」はグニェズノにある。また、ポズナンもそうした本拠地の一つで、市内を流れるヴァルタ川の中州オストロフ・トゥムスキ(「司教座聖堂の島」の意)には囲郭都市が築かれ、ミェシュコ1世の館と礼拝堂とがあった。

そうした訳で、今年になって続いたさまざまなポーランド洗礼1050周年祝賀イベントの「中心式典」がグニェズノ(4月14日)とポズナン(4月15-16日)で行なわれたのは、ごく自然だった。

中心式典2日目にはポズナン国際見本市で、つまりポーランド史上初めてワルシャワの外で、国会が召集された。大統領、国会議員、首相と諸大臣、



ポズナン国会で演説するアンジェイ・ドゥダ大統領
2016.4.15 (fot. Paweł Kula, flickr/sejmrp)

さらに1200名もの国内外からの賓客が列席する中、上下院によって採択された決議文が読み上げられ、「国家の創建者たち、並びに我々のアイデンティティを確定する原則に忠実であり続けた、全世代のポーランド人への感謝」が表明された。そしてアンジェイ・ドゥダ大統領が演説し、誰もが持つ自分のルーツを、ポーランド人はローマ・カトリック教会に持っていることを、喜びと誇りとともに訴えた。

「伝承によれば、ポラン族の統率者の洗礼はほぼ間違いなく966年の4月14日、聖土曜日に行なわれました。そしてその時ポーランドもまた生まれたのです。洗礼の水から新しいキリスト教的な生命へと生まれたのです。先史時代を抜け出しヨーロッパ史の舞台に登場したことで、世界にとって生まれたのです。民族的かつ政治的共同体として、自身にとって生まれたのです。というのも、ラテン典礼による洗礼の受容は、私たちのポーランドのアイデンティティを決定したからです。このときから、私たちは自分たちについてこう考え、言うようになったのです——『我ら、ポーランド人』と！」

2. 洗礼あるところ希望あり——ポズナン

そもそも、どうして1000年ではなく、1050年をかくも盛大に祝うのか？——その答えは、50年前のポーランドが置かれていた状況を考えれば納得が行く。50年前にも「ポーランド洗礼1000周年」の祝賀は行なわれたが、カトリック教会と対立する共産主義政権は「ポーランド国家建国1000周年」を喧伝し、「洗礼1000周年」のためにポーランドに来るはずだった教皇パウロ6世の訪問を拒絶した。そのため教皇の代理として、ポーランド首席大司教のステファン・ヴィシンスキ枢機卿(1901-81)が「黒い聖母」像のレプリカとともに、チェンストホヴァをはじめ主要都市を回った。どこでも数十万人の信者が枢機卿を迎えたが、それは常に共産主義政権との緊張を孕んだ祝賀だった。

それから50年、現在のポーランドはEUの一員として政治的にも経済的にも安定している。だが他方で、EUという大国の一地方として、発展と引き換えに自国の独自性を失っているのではないかと

いう危惧も聞かれる。カトリックのポーランドか、EUのポーランドか——現代ポーランド人のアイデンティティはこの間で揺れている。それに対して、大統領は演説の中で「競争とビジネスよりも連帯感、共同体意識が優先するポーランドとヨーロッパ」を提案し、ヨハネ・パウロ2世の言葉を引用して「ヨーロッパはポーランドを必要とし、ポーランドはヨーロッパを必要としている」と演説を結んだ。

式典3日目は終日ポズナン市営スタジアムで行なわれた。市民ボランティアのコーラス団が歌う祝賀賛歌「洗礼あるところ希望あり」とともに式典が始まり、祝賀ミサと成人の洗礼式とが行なわれ、ミュージカル「ジーザス・クライスト・スーパースター」がポズナン音楽劇場の俳優によって演じられ、3万人を超える会衆が参加した。この歴史的イベントに喜びと誇りをもって、自ら進んで参加したボランティアの数は計り知れない。賛歌とともに祝賀式典が始まる中、突然、妻の携帯電話にメールが届いた。スタジアムの観客席の一部を占めるコーラス団の一員として今まさに歌っているという友人からだった。「歌っているから、テレビで見つけてみて！」

3. ワールドユースデー(WYD)——クラクフ

4月の演説で大統領が述べたように、ポーランド洗礼 1050 周年の「クライマックスは教皇フランシスコのポーランド初訪問とワールドユースデー」だった。教皇は前回 2013 年のリオデジャネイロ大会の終わりに、次のワールドユースデーの会場はクラクフと宣言した。ポーランドは洗礼 1050 周年の年に教皇に会おうと世界中からやって来る数百万人の若者を歓待するホスト国に指名されたのだ。

こうして教皇フランシスコは、ドゥダ大統領らも出席する中ヤスナ・グラ(チェンストホヴァ)でポーランド洗礼 1050 周年の記念ミサを執り行い(7月 28 日)、アウシュヴィッツ＝ビルケナウ強制収容所を訪れて祈りを捧げ(7月 29 日)、クラクフのワギェヴニキにある「神の慈しみの聖地」で若者たちの告解を聞き、隣接する「ヨハネ・パウロ2世の聖地」でミサを行なった(7月 30 日)。ちなみに今年はポーランド洗礼 1050 周年、WYD クラクフ大会開催年に加えて、ポーランドの二聖人、聖ファウスティナ・コヴァルスカと聖ヨハネ・パウロ2世に関係の深い「慈しみの特別聖年」としてもバチカンによって定められている。その後、教皇はヴィエリチカ岩塩坑に近いブジェギの「慈しみのキャンパス Campus Misericordiae」で若者たちと徹夜の祈りに参加し翌朝(7月 31 日)大会フィナーレのミサを行なって WYD を終えた。このほか教皇はクラクフ市内のブウォニャ広場でも



WYD 参加の若者たちと教皇、ブジェギの「慈しみのキャンパス」にて (fot. flickr.com/episkopatnews/Mazur)

若者たちと直接会い(7月 28-29 日)、毎晩夕食後、滞在中の大司教館の「教皇の窓」に姿を見せ館前に集う若者たちに話し掛けた。

一方、若者たちは一週間ほど前からポーランドに来て各司教区で歓待され、観光したり、晚餐会で歌ったり踊ったり、福音を伝えたりしながら、教皇を目指してクラクフへ向かった。マスコミによると、フィナーレのミサには 250 万人もの巡礼者が参加したという。この巡礼団を家に泊め、食べさせ、時には車で運んで、至れり尽くせりのホームステイを提供するのが、今回ポーランドの役目なのだ。

私の住むポズナン司教区にはペルー、オーストリア、アメリカ、マルタ、メキシコ、フランス、スペイン、ウクライナ、カナダ、マダガスカルの若者たちが来た。皆ポーランドでの歓待ぶりに感激し満足してクラクフへ発ったようだ。ポーランド料理のピエロギ(ポーランド風水餃子)が大人気だったとも聞いた。

ヴウォツワヴェク(ワルシャワとトルンの中間にある都市)に住む私の義父母もアルゼンチンからの巡礼者ヴィルジーニアとテレザをホームステイさせた。英語も話せないのに大丈夫かと心配したが、コンピュータの自動翻訳サイトを介して問題なく会話できたという。テクノロジーの進歩に時代の変化を痛感すると同時に、しばしばポーランド人の国民性としても挙げられる「おもてなしの心 gościnność」が変わらず健在なのを嬉しく思った。(つだ てるみち)



ヴウォツワヴェクを訪れた WYD 巡礼団と筆者の義父母クシシュトフとマリア(前列左端)